

【研究主題】 日本語指導教室を通して、学びの空白を埋める授業づくり

【副題】 ～言語の壁を乗り越える。子どもの基礎学力の保障と教材の工夫の実践～

【学校・団体名】 滋賀県彦根市立高宮小学校

【役職名・氏名】 教諭 吉田 真理

## はじめに

近年、公立学校における日本語指導が必要な児童生徒が増加しており、特に小学校段階での学習の機会や環境整備の確保が重要である。本校では現在19人の外国籍児童がおり、クラスに1人以上の外国籍の児童が共に学習に励んでいる。

本年度、新たな取り組みとして日本語指導対応加配教員として日本語指導教室の運営の役割を担うことになった。特に日本語指導が必要な児童11名と共に、どのように学習を進めていけばいいのか試行錯誤しているなかで、特別支援学級担任を経験してきたことを活かし、授業づくりにおける多様な支援と児童との関係づくりを軸に取り組んできた。

### 1. 児童との関係づくり

外国籍児童の学習を始める前に、児童の実態把握とアンケートを行った。特に重視したのは、児童との対話と傾聴である。ことばが通じないからと身構えるのではなく、『どうしたら伝わるか。』『世界各国の子どもが共通してわかることは何か。』『何が苦手で、どんなことができるようになりたいのか。』など、ポケトークなどの翻訳機器を活用したり、絵を描いて確認したりするなどを、多様な手段でくり返し行った。また、児童が話している時や話し始めた時は、とにかく聞くことに集中した。それらを通してわかったことは、児童らは「日本語がわからないからこそ、勉強がわかるようになりたい。」という、高い学習意欲をもっているということである。「スピーチに挑戦したいが、どう言えばいいのかわからない。」「作文を書きたいけれど、どうやって書き始めたらいいかわからない。」など、学習の目的意識が強く、「日本語指導教室に行けばわかる。できるようになる。」という、日本語指導教室への期待値が高いこともわかった。

### 2. 外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント(DLA)の実施

外国籍児童の日本語能力を把握するために、JSL対話型アセスメントを援用し、実施した。児童の日本語能力を明らかにして、どのような指導や対応が必要かを知るための評価ツール数値に表すことで、手立てと課題が明確になってきた。

#### 【DLA実施結果(一部)(令和6年7月末現在)】

学年・児童	DLA (はじめの一步)	DLA (話す)	DLA (書く)
1年 A児 (スペイン語)	母語で解答 (正答26/55問)	1	
4年 B児 (スペイン語)	母語と日本語で解答 (正答26/55問)	1. 7	
5年 C児 (スペイン語)	母語で解答 (正答18/55問)	1	
5年 D児 (ポルトガル語)	日本語で解答 (正答39/55問)	3. 3	1. 6
6年 E児 (ポルトガル語)	日本語で解答 (正答24/55問)	3. 2	2
6年 F児 (スペイン語)	母語で解答 (正答10/55問)	1	

本校の外国籍児童の実態として、『日本語の読み書きが難しい。』『支援を受けて、日本語の読み書きと簡単な会話ができる。』『日本語の読み書きや日常会話はできるが、文章を書くことができない。』の、大きく3つに分けられた。話すことが充分できている児童は、書くことに困難と課題が見られることもわかった。

### 3. 学びの空白に気付く

児童との対話やアセスメントを通して、「勉強がわからない。」という声が、特に気になった。『勉強がわからない原因は何か。』『どんな勉強がわからないのか。』などを考えた時に、言葉がわからないまま学習が進んでいった『学びの空白』があることに気付いた。そのため、外国の学習内容や環境などの資料を読んだり、児童に全学年の教科書を提示して、理解している内容と学習

経験がない内容の確認を行ったりした。本校の外国籍児童のほとんどが年度途中で転入（入国）しているため、学習についていけない要因として、日本語をはじめ、他教科での学習経験不足も課題であることがわかった。また、特に算数科において苦手意識をもつ児童が多かったため、日本語（国語科）に限らず、算数科においても同様の確認を行った。

【外国籍児童の未履修内容の結果（一部）】

学年・国名	未履修
1年 A児 (ボリビア)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学前に入国のため、日本語はほぼ読み書きできない。</li> <li>・数字は書けるが読めない。</li> </ul>
4年 B児 5年 C児 6年 F児 (ボリビア)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひらがなの読み書きの一部はできるが、挨拶や日常で使うことばの読み書きがわからない。</li> <li>・図形（作図）・表とグラフ</li> <li>・分数・小数・時刻と時間</li> <li>・面積・体積・長さの単位など</li> </ul>
6年 E児 (ブラジル)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1・2年生で学習する単元</li> </ul>

4. 授業実践（学習教材や手立て）

(1) 「ひろこさんのたのしいにほんご」  
ひらがなの読み書き練習のために活用している。発音練習と読み書き練習を毎時間行いながら、あいさつや文房具など、学校や生活で身近なものに関連させて取り組んでいる。



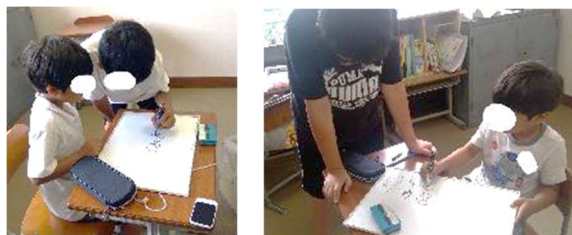
(2) 「みえこさんのにほんご」  
ひらがなの読み書きの復習と、会話練習のために活用している。「ひろこさんのたのしいにほんご」で、言葉をたくさん学習した後に実施したため、児童の言葉の理解が早かった。場面絵を見て、日本語で「これ、した。ある（したことがある。）」と、反応が多い教材である。



(3) 「JYL会話練習」  
児童の日本語能力段階に合わせ「みえこさんのにほんご」と併用しながら活用している。ひらがなとカタカナの習得が進んでからの学習内容のため、スモールステップをくり返しながら取り組んでいる。



(4) ホワイトボードの活用



異学年の児童とペア学習をした際、児童らが母語で積極的に教え合う姿が見られるようになった。児童が学び合うなかで、自分の考えを書き表したいと、日本語や身ぶり手ぶりをを使って教師に伝えることができたため、ホワイトボードを準備し活用させた。

(5) 特別支援教育教材の活用

学習の理解や達成感をもたせるために、さまざまな特別支援教材を組み合わせながら学習に取り組んだ。未履修の学習と、今の学年の学習をつなげていくために、どの学年の学習単元まで遡っていけばいいか、系統性を考えながら学習計画を立てて学習を行った。



【算数科の学習系統性を考えた学習計画】

6年 F児 算数科【円の面積】全14時間 図形と面積の用語、作図などが未履修の場合		
①	2年 長方形と正方形	用語と作図の学習
②	3年 三角形と円	用語と作図の学習
③	4年 平行四辺形	用語と作図の学習
④	①～③の復習	基礎学力の確認
⑤	4年 面積	用語と公式の習得
⑥	5年 面積	用語と公式の習得
⑦	⑤・⑥の復習	基礎学力の確認
⑧	6年 円の面積	用語と公式の習得
⑨	6年 円の面積	練習問題の反復
⑩～⑬	6年 円の面積	基礎学力の確認
⑭	円の面積 テスト	



5年 C児  
日本語学習と合わせて、算数科「ほうグラフ」「グラフの読み取り」の学習を実施



4年 B児  
日本語学習と合わせて、算数科「円」の学習を実施  
コンパスで作図を経験

(6) 学習支援ソフト「ランドセル」



外国語に対応してはいないが、解説音声ゆっくりであることで、児童が聞き取りやすく、操作もわかりやすいため、練習問題などに活用した。また、ことばで十分に説明しきれない部分があるとき、図形がわかりやすく示してくれるため、面積や分数などで特に活用した。

(7). 「わかった!」「できた!」がある授業づくり

児童の主体的な学びを目指すために、モジュール授業やスモールステップを学習に取り入れた。①ことばの読み書き、②会話練習、③名詞・動詞・形容詞、④ことばあそび、⑤算数科の基礎問題など、児童の発達段階や日本語能力に合わせて教材や教具を準備し、楽しみながらことばの学習ができるようにした。

◎低学年の児童は、ことばあそびを積極的に取り入れた。ひらがなカードを用いてことばづくりをしたり、文字の書き間違い探しをしたりして、正しく書く学習をしたりした。



2年 G児の授業例 (45分)

- ①音読・ことばを読む (10分)
- ②ことばあそび (10分)
- ③書く (文づくり) (10分)
- ③ことばあつめ (10分)
- ④算数科基礎問題 (5分)

◎高学年の児童は、日本語基礎と書くことについて、きめ細かく指導した。日本語を話すことができても、わかりやすく書き表せないため、スモールステップを取り入れた。



5年 D児の授業例 (書くことに課題)

- ①テーマを決め、書きたいことを対話し、内容を整理する。
- ②資料の引用の仕方の学習をする。
- ③原稿用紙の使い方の学習をする。
- ④ひらがなや漢字の使い分け、句読点の打ち方などを、きめ細かく指導した。

◎学びの空白がある児童は、日本語指導と算数科指導を組み合わせた授業構成を考えた。算数科では『大きな数 (4桁の数の読み書き)』と、日本語学習の『値段を尋ねる・〇円です。』と答える』学習を組み合わせ、自作したお金の教材を使いながら会話練習も行った。



算数科の『長さ (mm・cm・m)』の学習では、算数科教具の巻き尺を用いて1mがどれくらいの長さであるか、目盛りの読み方などの学習を行った。学習中に児童が「身長を計りたい。」と言葉で伝えることができたことをきっかけに、身長や教室内の様々なものを自由に計れる時間をつくった。



5年 C児・6年 F児  
身長や身の回りのものなど、興味をもったものをどんどん計っていた。

6. 成果 (子ども・学校の変容)

①子どもたちの成長 (6年F児の変化)

6年生のF児は、令和6年の4月時点で、来日してから3か月しか経っておらず、ほとんど日本語のやりとりができなかった。また、終日マスクをつけており、表情の変化も乏しく自発的に話すことも少なかった。

5月になると、日本語指導教室ではマスクを外すようになり、笑顔を見せ始めた。日本語が少しずつ聞き取れるようになったことと、クラスに友達ができていることが明るさにつながり、学習においても児童の成長が見え始めた。また、算数科の教科書を持参し、「円の面積のわからない。勉強したい。」と伝えることができたことで、個別に系統的な計画を立てて学習を行った。

6月には、「わかる。」「むずかしい。」「日本語、何? (日本語でどう言うのか。)」などと、自発的に尋ねるなど、ことばとジェスチャーで簡単なやりとりができるようになった。また、クラスでは、タブレットの翻訳機能を使って学習に取り組んだり、母語でまとめや自主

学習に取り組んだりして、意欲的に学習していることも知ることができた。

## ②子どもたちの認知の変化（日本語指導教室の役割）

本校の日本語教室は、個別指導を目的としているため、数人程度が入れるほどの広さの教室を使用している。4月当初は、校内の児童がふざけて覗いたり、「この教室は何してるんやろ?」「わからん。」と、好奇の目で見られたりすることがあった。子どもたちの何気ない言動ではあるが、外国籍児童に対する偏見や差別につながるのではないかと懸念し、日本語指導教室での学習や、外国籍児童の努力を校内に周知するために、学習の掲示・作成を行った。



教室内と廊下一面に、学習の足跡を掲示。月ごとや学習ごとに入れ替えを行った。

大きな変化が見られたのは、5月である。休み時間に、6年生F児とクラスの児童が学習掲示を見ながら、談笑していた。また、4年生B児がクラスの友達を連れて来て、日本語教室の紹介をしていた。それ以来、学習掲示を見に、児童が代わる代わる来るようになり、6月あたりから、「あ、〇〇君が勉強している写真がある。」「ここは、外国の子が勉強している教室やで。」「何か楽しそう。いいなあ。」など、前向きな声が聞こえるようになり、ふざけて覗く児童はいなくなった。日本語指導教室の在り方や、外国籍児童の学習の頑張りを、子ども達の力で広げることができたと実感できた。

## 7. 課題

### (1) 児童に合った教材づくり

日本語の学習をするにあたって、どの教材を活用したらよいか、未だに試行錯誤している。日本語能力の向上に合わせて教材も工夫したいが、教材が見つからなかったり、児童に合わなかったりすることの繰り返しである。そのため、個別に学習教具を自作したりワークシートを作成したりしている。

### (2) 乗り越えられない言語の壁と気付き

学習では、タブレットや翻訳機器を使用しているが、機器やウェブサイトごとに翻訳のことばが微妙に違うことがあった。果物の名前の学習をしたとき、桃の単語について、5年生のC児が「そのスペイン語、違う。」と答えた。辞書とウェブサイトでは melocotón であったが、C児が使っていることばは、durazno であった。どちらも桃という意味ではあるが、児童の母語を大切にしたいと思い、それ以降、翻訳で迷う時は、積極的に児童に聞くようにしている。日本語の意味が多様なように、外国語も多様である。そのため、辞書とポケットク、翻訳サイトの3つを併用しながら、「どの言い方が一番わかりやすいか。伝わりやすいか。」を確認しているが、正しく伝えられているか不安は常に残っている。

### (3) 『話せる・読める』から『書ける』へ

本校の外国籍児童は、書くことに困難と課題が大きく見られる。これは、二重言語の習得により、母語から日本語へ変換した後、文字にするというステップを踏んでいるため、考えている事と書きたい事が一致しにくいことが要因であると考えられる。また、ひらがなやカタカナ・漢字などの習得が十分ではないため、使い分けて書く事ができなかつたり、話し言葉をそのまま書き連ねるだけであつたりする。そのため、書くことに課題がある児童は、日本語指導だけでなく、国語科の単元に合わせて取り出し授業を行っている。

## 8. おわりに

本年度4月から開始し、たった4か月の間ではあるが、11名の児童の大きな成長を感じることができた。今後も、多様な支援のある授業づくりと、個別最適化な学習教材の作成に取り組むとともに、外国籍児童の学習機会の確保や、学びの空白を埋めることを担う、唯一無二の教室運営を行っていきたい。

### 引用・参考文献

- ・「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」文部科学省
- ・「ひろこさんのたのしいにほんご」にほんごの凡人社
- ・「みえこさんのにほんご」三重県教育委員会
- ・「外国人生徒のための会話練習教材」JYL Project こどもの日本語ライブラリ
- ・「どの子もわかる算数プリント」喜楽研
- ・「学習支援ソフト ランドセル」がくげい